「権力ゲーム」でいいのか

写真は臨時国会の冒頭で衆院が解散され、一礼する安倍晋三首相=28 日午後、国会内(朝日新聞 9 月 29 日朝刊)。解散の閣議書への署名を拒否した閣僚は、一人もいなかったようだ。標題の同紙社説を抜粋して紹介する。

言論の府から言論が消えた。悪しき例が歴史に刻まれた。安倍首相が臨時国会の冒頭、衆院解散に踏み切った。首相の所信表明演説も代表質問や予算委員会もなく、北朝鮮に非難の意思を示すはずだった国会決議も見送られた。首相は 8 月の内閣改造後、本会議での演説に臨んでいない。そんな状況での解散は戦後初めてのことだ。国民に解散理由などを説明する恒例の記者会見も、きのうはなかった。

そもそも臨時国会は、野党の憲法 53 条に基づく召集要求を、3 カ月余も放置した末にようやく開いたものだ。なのに議論を一切しないまま解散する。憲法を踏みにじり、主権者である国民に背を向ける行為だ。

首相の狙いは明白である。森友学園・加計学園の問題をめぐる野党の追及の場を消し去り、選挙準備が整っていない野党の隙を突く。今なら勝てる。勝てば官軍の「権力ゲーム」が先に立つ「自己都合解散」である。民意を政治に直接反映させる民主主義の重要な場である選挙を、権力維持の道具としか見ない「私物化解散」でもある。

政党政治の危機を思わせる事態は、野党陣営でも起きた。政権与党に代わりうる「受け皿」をめざしていたはずの民進党が、発足直後でまだ具体的な政策もない「小池新党」に飲み込まれたのだ。東京都の小池百合子知事の人気に頼る新党「希望の党」は、政党として何をめざすのかも統治能力も未知数だ。

このままでは、政策を二の次にした選挙目当ての互助会という批判は避けられまい。旧民主党政権の挫折から 5 年たっても、失われた国民の信頼を取り戻せない。そんな民進党の焦りも理解できなくもない。それでも民進党には、もう一つの道があったはずだ。ここ数年、地道に積み上げてきた野党共闘をさらに進め、共産党を含む他の野党との候補者調整を実現し、そこに新党も加えて、自公と 1 対 1 の対決構図をつくり上げる―。だが前原代表はその道を模索する努力をせず、小池人気にすがる道を選んだ。これもまた、「権力ゲーム」ではないのか。

下 2 枚の写真は朝日新聞 29、30 日朝刊、やくみつるさんの風刺漫画。「ペアルックで……」「独断選考いたします!」と。こんな民進解体劇、新党づくりには、到底「希望」などもてない。またレポートしたい。

（2017 年 10 月 1 日）